

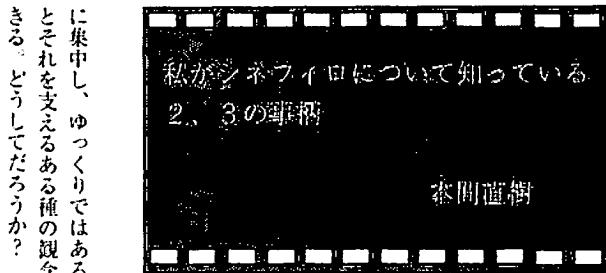


Title	私がシネフィロについて知っている2、3の事柄
Author(s)	本間, 直樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 45-46
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/71178">https://hdl.handle.net/11094/71178</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



ラミレス氏が適確に述べているように、映画をみるとことはまぎれもなく一つの経験だ。哲学カフェにはそれが欠けている。有り体に言えば、方法論なしの哲学カフェは参加者の「妄想」の捌け口となる。それは具体的な経験でも明確な概念でもない混乱した観念だ。そもそも自分の経験を距離を置いて記述することは難しいうえに、さらに事後的に多数で共有することは一層困難だ。そのためには文学的な能力や聴取る技法が要求されるし、自分の経験を曝し出す発言者にもリスクがかかる。

シネフィロは面白い——これが最初の感想。私はパリで多くの哲学カフェを経験したが、これといった方法論もないまま、司会者の力技が状態に終わつてしまふ後者に比べ、シネフィロでは人々はスムーズにテーマに集中し、ゆっくりではあるが映画の核心部分とそれを支えるある種の観念に触れることがでできる。どうしてだろうか？

参加者の具体的な体験の記述をもとに議論する「(ネオ)ソクラテス的対話(ソクラティック・ダイアローグ)」という方法がある。人々が魅了されるのは、言葉による経験の記述の層とそれを支える諸観念の層が見事に析出される瞬間がそこに生じるからだ。うまくいったシネフィロには同様のこと、いやそれ以上を見いだすことができる。まず参加者全員が二時間ほどの経験を共有する。これはソクラテス的対話にはないメリットだ。そして映画の後で参加者が映画を言葉で記述する。それは解釈学的な作業であり、一つの動作、一つの映像を理解するための解釈や観念の枠組みが問われることになる。もちろん司会者の技量によるところも大きいが、カフェフィロ的な漂流なし空中戦にならないのは、準拠すべき経験が厳然とそこにあるからだ。

題材なしの哲学的対話が終わるとするに忘却さ



## パリ留学中の本間語師と愛犬まめ

されてしまうのに対し、映画の経験そのものは、その後も私たちの経験の一部として生き続ける。それだけに上映直後のこの時間は経験の吟味する哲学にとって大変貴重なのだ。

もう一つ比較のためにパリでしばしば聞かれる映画作家を招いての上映会をあげておこう。

観客にとつては映画作家は文字どおり「創造主」の位置にあり、両者の間に交わされる言葉は一方通行で、発言内容も良くも悪くも「マニアック」だ。撮影の苦労話や作家の意図などを聞くにつけとも、一度出来上がった作品にとつて作家はもはやその「外部」に位置するのだと思ふ。知ら

される

ところで、私のたつての希望で、是枝裕和監督作「ワンダフルライフ」のシネフィロが実現した。死後に天国に向かう中繼地點で死者たちが

例外的な存在だ。大学の専門家が音頭を取つて、カフエフィロを開くと、いう日本の現状は彼ら彼らにとつては驚愕の対象であるといつてよい。しかし、今後哲学カフエをどこで、どのような方法論で、どのような人たちと行うのか、私たちの課題は大きい。

(ほんまなおき

チエ的な主題を扱った作品ではあつたが、よく理解できなかつた観客も多かつたようだ。キリスト的世界観をもつ参加者の一人は、人生はより幸福な未来向かうプロセスであり、一瞬だけを選ぶことはナンセンスであると主張し、別の参加者は、どうして死を迎えた後の人たちがなぜあのように平然としているのかが分からぬと述べていた。

蛇足ながら、最後にパリの哲学カフェ事情について一言。正直なところ、パリの哲学カフェは病んでいる。より正確には、動けないでいる。哲学カフェの数は減少し、参加者は固定しているうえ（多くは定年退職者）「参加者が平等に発言できること」はいまや検証の必要のないイデオロギーになり、司会者の技術や方法も吟味や評価のないまま個人芸に終わっている。大学の職業哲学者はカフェエフィロを見下し（無視し）、カフェエフィロフリーラクは「知識人」を毛嫌いしている。（ラミレス氏は哲学の方法と理論を重視し、哲学カフェの社会のなかでの機能を考える）